

母親の子ども・育児感情

—虐待の温床としての育児不安の要因—

山川 玲子・柏木 恵子*

Abstract

This investigation was conducted by the use of a questionnaire. 306 mothers who had children aged 0 to 3 responded and made clear what were the influences on emotions regarding mother's childcare.

It confirmed that emotions regarding mother's childcare consisted of feelings towards 4 factors — the isolation from husband, the affirmation of childcare, the denial emotion of childcare and the intention of society's participation. A wife who lacked a cooperative husband who assisted with housework or childcare had an immense feeling of isolation. Mothers having 2 year or 3 year old children displayed a higher denial emotion of childcare than mothers having a 0 year old child.

Mothers who married after pregnancy had less feeling regarding the affirmation of childcare.

Key Words : childcare emotion, husband's housework, husband's childcare and isolation

〔問題と目的〕

「母親も祖母もしてきた育児……誰もがしてきた育児なのに、私だけがこんなに辛いのは母親として失格ではないか……」相談員として相談現場でこのような母親の自責の声を数多く耳にしてきた。はたして「母親」の時代も「祖母」の時代も育児は同じなのであろうか。確かに子どもを生んで育てることは、人類が誕生して以来脈々と受け継がれてきたことである。しか

Mother's childcare emotion—Childcare uneasiness as a hotbed of abuse—

*Reiko Yamakawa・Keiko Kashiwagi

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 27, 2004. Published December 20, 2004.

し育児を取り巻く状況、いや育児そのもののかたちや中味は常にとどまることなく変化し続けている。特に近年、科学技術の進歩に伴って家事の機械化や省力化が進み、女性、特に母親にとって、家事育児に時間的・心理的余裕をもたらしたが、そのことが女性、母親にとって家事に生きがいや充実感を見出すことを難しくさせている（柏木、1998）。

2003年の合計出生率（1.29人）は過去最低となり少子化のいっそうの進行は、こうした育児状況の問題を反映している（厚生労働省「人口動態統計」2003）。このような人口動態的变化は、医学の進歩と、確実かつ安全な受胎調節の普及によって子どもを「授かる」ものから「つくる」ものへと変化させ、女性のライフサイクルを大きく変えた（柏木、1999）。一方寿命は長くなり、育てる子どもの数が減ったことで「女性にとって母親以外の期間が長くなった」といわれ、女性＝母親の人生という時代は終わりを告げ、母だけでなく妻だけでもない、わたし個人としての人生を生きる必要性和重要性が浮き彫りになってきている（柏木、1998）。

このように女性の個人化や、個人としての自己実現や家族観、夫婦関係など、母親の育児を取り巻く諸相の変化は様々に論じられ、社会学では「個人化する家族」（目黒、1987）「個人単位の家族」（落合、1997）として指摘されてきた。家族の一体感よりも、個人としての自分自身を重視する傾向は、既婚女性に広く見出されている（永久、2001）。子育てを取り巻く母親の様々な感情を理解するには、こうした社会的な変動の流れの中で捉えていかなければならない（柏木、1999）。

では現在子育て中の母親は結婚前、どのような生き方をしているのだろうか。女性の結婚前就業経験は、1955年の49%から上昇してこの20年で100%上限に近い水準で推移しており、そのほとんどがフルタイムで就労している（毎日新聞社人口問題調査会、1998）。しかし、その7割近くの女性たちが出産を機に退職し、専業主婦として育児に関わっている。その背景には、「3歳までは家庭で母親の手で育てないと子どもの発達に悪影響を及ぼす」との言説があり（厚生科学研究所、1997）、働く母親への批判となってきた。ではこの7割近くの女性たちは、努力がそれなりに評価されることをたてまえとした社会で生き、結婚、育児に方向を転換した後もそれまでと同じように努力が報われたと感じ、いきいきと生きることができているのだろうか。相談現場で耳にする母親の声は、思うようにならない子育てに24時間アンテナを立てて挑み、子育ては母親の仕事と全責任を負わされることへの重圧、子どもは可愛い結婚や育児と引き換えにしたものは大きいものであったと語られることが多いと感じている。

このように若い母親の育児に対する負担感が増えているという報告やそれをめぐる研究が蓄積されてきた（大日向、1996；菅原、1999；柏木、1979、1982、1993；柏木・若松、1994；牧野、1987；佐藤ら、1994；田中、1994、1997）。

2003年、子育ての実態調査0歳児から3歳児までの保健所での乳幼児健診対象者、厚生労働科学研究「兵庫レポート」（原田他、2003）では、20数年前同じように行われた「大阪レポート」（服部・原田、1990）と比べて以下について明らかにしている。①乳幼児をまったく知らないまま親になる母親たちの一層の増加、②子育て家庭の孤立化の進行、③育児での不安やイ

ライラ、負担感の急増、④親子関係が大きく変化し、従来の「体罰」「厳格」「不安」に加えて、「期待」と「干渉」が極端に増加し「子育て競争」が激化し、親の思い通りに子どもを支配したい傾向が強まり「不安とイライラ」の中で「体罰を用いた」との答えが多かったという報告がされ、子どもの虐待が憂慮されている。

ところで、このような研究から母親の育児感情には肯定感情と否定感情がアンビバレントに存在することが先行研究で明らかにされ（柏木・若松，1994），育児不安の要因分析的な研究は妻の夫からの孤立，社会からの孤立が極めて重要な要因であることが指摘されている。では子育てする現時点での，母親の育児をめぐる感情はどのようなものであろうか。児童虐待防止法施行から平成15年6月までに厚生労働省が把握している125事例の死亡被虐待児のうち78%が3歳児以下であるとの報告を踏まえ，0歳児から3歳児までの子どもを，夫とともに子育てをする母親に焦点を当てて検討する。本研究では今の母親の育児をめぐる感情について検討することは意義があることと考え，以下について検討することを目的とする。

- 1 育児不安や育児ストレスを虐待の温床として捉え，育児の孤立化が急速に進んでいるという視点から，母親の育児をめぐる感情の構造を明らかにする。
- 2 これまで育児不安や育児ストレスに関する先行研究は，職業をもつ母親よりも，無職の母親に育児不安が強いことを明らかにしている（横浜市教育委員会・預かり保育推進委員会，2001；厚生省，1998；内閣府国民生活局「平成13年度版国民生活白書」）ことから育児をめぐる感情と母親の就労形態との関係について検討する。
- 3 先行研究では夫の家事育児分担が母親の育児感情と関係していることを明らかにし（柏木・若松，1994），さらに育児ストレスとの関係も示唆されている（清水，2003）ことから，夫の家事育児の分担と母親の育児感情との関係について検討する。
- 4 相談現場では子どもの年齢が高くなるにつれて関わりにくさの訴えが多いと感じることから，子どもの年齢で育児感情は異なるのではないかと考え子どもの年齢と母親の育児感情との関係について検討する。
- 5 今，4人に1人が「できちゃった婚」（厚生労働省「人口動態統計特殊報告」2002）との報告がある。計画にはない，「できちゃった」という生を受けた子どもと母親との関係はどのようなものであろうか。妊娠動機が対児感情と密接に関連しているとし，妊娠動機が低いことは育児不安につながり虐待との関係が憂慮されている（花沢，1995，1996）ことから，妊娠状況と育児をめぐる感情との関連について検討する。

【方 法】

〈調査協力者〉

調査協力者は，0歳から3歳までの子どもをもつ母親で，夫と一緒に子育てをしている母親

を対象とした。

〈調査手続き〉

埼玉県内の公立保育園3園に在園する0歳から3歳までのクラス担任の協力を得、調査用紙は園児を通して配布し、回収箱を園内に設置し回収した。私立保育園3園、無認可保育園1園では調査用紙を保育士から手渡しで配布して頂き、同封した切手を貼った返信用封筒にて郵送回収をした。また無職の母親については、保育園に併設された子育て支援センター、母親主体の育児サークル、知人を介して調査用紙を配布し後日郵送で回収した。質問紙、封筒共に無記名とした。調査時期は2003年8月から9月である。

〈調査内容〉

調査内容は以下の通りである。

① 育児をめぐる感情に関する項目は次のA・Bから成る。

A 夫からの孤立、及び社会からの孤立に関する項目20項目；育児相談等の母親の語り及び平山（1999）を参考に項目を選定した。

B 子育てに関する肯定感情・否定感情項目31項目；肯定感情と否定感情に関するものとして柏木・若松（1994）、福丸・無藤・飯長（1999）、育児相談での母親の語りを参考に31項目を選定した。

② 夫の家事育児に関する項目15項目；夫が日常どれ位、どのような家事育児を行っているのかについて、家事や育児に関する項目を、柏木、若松（1994）、柏木他（2003）を参考に17項目を選定し、作成した。

以上について「まったくしない」（1点）から「よくする」（4点）の4段階評定で回答を求めた。

さらに、結果の分析にあたって必要な項目として母親の年齢、父親の年齢、子どもの年齢、兄弟姉妹の有無、父母の親同居の有無、母親の就労形態、就労している場合には本人の帰宅時間、父親の帰宅時間をとりあげ、フェイスシートで記入を求めた。現在無職の母親には就労経験について、「結婚するまでは働いていた」「子どもが生まれるまでは働いていた」「働いた経験はない」の3つの選択肢で回答を求めた。また、対象児の妊娠状況について、「結婚した後自然に妊娠した」「結婚した後夫と相談して妊娠した」「妊娠したので結婚した」「妊娠しなかったのが治療をして妊娠した」「なかなか妊娠しなかったが自然に妊娠した」の5つの選択肢を設け回答を求めた。

〔結果と考察〕

1 調査協力者に関する属性

調査協力者は459人、うち回収数325人、有効回答306人、回収率70.8%、有効回答率66.7%

であった。母親の平均年齢は32.5歳，父親の年齢は34.4歳であった。1世帯の子どもの平均数1.6人。母親の就労状況は，専業母親40.5％ フルタイム35.5％ パートタイム24％。現在専業母親の就労経験は，結婚するまでは働いていた31.7％，子どもができるまでは働いていた66.7％，働いた経験がない1.6％。家族形態は核家族が87.6％，拡大家族が12.4％。父親の帰宅時間は，20時まで帰宅が31.0％，22時まで帰宅が47.3％，22時以降に帰宅が21.8％。就労している母親の帰宅時間は17時までが31.8％，18時までが38.6％，19時までが23.3％，19時以降は6.3％であった。

表1 調査協力者に関する属性

母親の年齢	平均32.5歳（年齢範囲21～44歳）		父親の帰宅時間	20時まで	91	31.00%	
母親の年齢分布	20代	77	子どもの人数	22時まで	139	47.30%	
	30代	208		22時以降	64	21.80%	
	40代	21		1人	154	50.30%	
母親の就労	専業母親	121	対象児の年齢分布	2人	116	37.90%	
	有職母親	182		3人	28	9.20%	
就労形態	パートタイム	65		4人	8	2.60%	
	フルタイム	117		0歳	66	21.60%	
現在無職の母親の就業体験	結婚するまで働いていた	39	1歳	90	29.40%		
	子どもが生まれるまで働いていた	87	2歳	89	29.10%		
	働いた経験はない	2	3歳	61	19.90%		
母親の帰宅時間	働いた経験はない	2	1.60%	家族構成	核家族	268	87.60%
				拡大家族	38	12.40%	
				妊娠状況	結婚後自然に妊娠した	128	43.40%
					結婚後夫と相談して妊娠した	78	26.40%
妊娠したので結婚した	41	13.90%					
治療して妊娠した	12	4.10%					
父親の年齢分布	20代	41	13.40%	妊娠しなかったが自然に妊娠した	29	9.80%	
	30代	220	71.90%	その他	7	2.40%	
	40代	42	13.70%				
	50代	3	1.00%				

2 育児をめぐる感情

2-1 育児感情の構造

育児をめぐる感情がどのようなものかを明らかにするため，育児感情尺度51項目の評定値を

基に因子分析を行った。まず、主因子法により51項目間の相関行列の固有値を求め、固有値が激減しているところで4因子と決定した。因子数を4に指定し全てに因子負荷の絶対値が.40以上になるまで因子分析を繰り返す（最尤法・プロマックス回転）。その結果、最終的に4因子33項目が得られた（表2参照）。

第I因子は「夫は家のことより自分のことを優先させる」「育児の大変さは夫にはわかっていない」「夫の日頃の生活は父親としてはどうかと思う」などの項目に負荷量が高く、同じ子どもの親でありながら、あてにならないと感じる母親の夫への否定的な感情と解釈でき、〈夫からの孤立感〉と命名した。

第II因子は「自分はこれでいいのかと自信がなくなる」「こうしていいのかと焦る」「他の人はうまく子育てしているように見える」「子どもにあたりたくなる」などの項目に負荷量が高く、母親の子育てへの否定的な行為や感情を表す項目と解釈でき、〈育児否定感情〉と命名した。

第III因子は「育児はやりがいがある」「育児は楽しい」「子育てで人間として成長している」などに負荷量が高く、母親が子育てする中で感じられるポジティブな生活感情として解釈ができ、〈育児肯定感情〉と命名した。

第IV因子は「社会の一員として働きたい」「自分の関心や力を社会で活かしたい」などに負荷量が高く、平均値の高さからも社会とのつながりを強く求めている項目と解釈でき、〈社会参加志向〉と命名した。

因みに、因子間相関の結果は（表3）の通りである。〈育児否定感情〉と〈育児肯定感情〉との間に弱い負の相関（ $r = -.35$ ）が見られ、また〈夫からの孤立感〉と〈育児否定感情〉との間に弱いながらも正の相関（ $r = .34$ ）が見られた。このことは、〈夫からの孤立感〉が高くなれば母親の〈育児の否定感情〉も高くなる可能性を示唆している。

2-2 育児をめぐる感情の比較

育児をめぐる感情と就労形態

育児感情がどのようなものと関係しているのかを検討するため、まず母親の就労形態で見てみることにしよう。就労の違いによって次の3群に分けた。①現在無職の専業母親群、②週労働時間が30時間未満のパートタイム群、③パートタイムではあるが、週労働時間が30時間以上をフルタイム群に加えてフルタイム群とした。

この3群について、育児をめぐる感情因子である〈夫からの孤立〉〈育児の肯定感情〉〈育児の否定感情〉〈社会参加志向〉の比較検討を行った。その結果、〈夫からの孤立〉〈育児の肯定感情〉〈育児の否定感情〉では無職、パート、フルタイムの群間には有意差は認められなかった。しかし、〈社会参加志向〉に有意な差が見られた（ $F(2,297) = 33.17, p < .001$ ）。tukey法を用いた多重比較によれば、パート、フルタイム就労の母親が無職の母親よりも〈社会参加志向〉の平均値が高かった（表4）。

表2 育児感情尺度の因子分析（最尤法，プロマックス回転）

		成 分			
		1	2	3	4
夫からの孤立感	夫は家のことより自分のことを優先させる	0.794	-0.059	0.083	0.015
	育児の大変さは夫にはわかっていない	0.786	0.006	0.024	-0.067
	夫の日頃の生活は父親としてはどうかと思う	0.760	-0.036	-0.045	0.038
	夫は父親として良くやっている	-0.755	0.169	0.119	-0.043
	夫に子どもを預けるのは頼りない	0.748	-0.063	0.199	-0.192
	夫はわたしや子どもが病気の時に頼りになる	-0.682	0.113	0.048	-0.082
	夫は育児の大変さをねぎらってくれる	-0.675	0.134	0.238	-0.040
	もっと育児や家事をしてほしいと思う	0.666	0.079	0.104	0.079
	わたしだけに育児の責任がかかっている	0.662	0.144	0.037	-0.014
	夫はわたしの話を聞いてくれる	-0.660	0.024	0.157	-0.057
	夫は仕事で疲れて機嫌が悪い	0.567	0.142	0.071	-0.013
	子どもが生まれてから夫と私は距離ができた	0.511	0.177	-0.062	0.099
	夫は子どもを預けられると不安なようだ	0.492	0.110	0.327	-0.203
	子どもが生まれてから夫との会話が減った	0.488	0.172	-0.031	0.124
夫といろいろな点で対等だ	-0.451	-0.054	0.052	0.097	
否定感情	自分はこれでいいのかと自信がなくなる	0.021	0.739	0.082	0.035
	こうしていいのかと焦る	0.019	0.711	0.216	0.087
	他の人はうまく子育てしているように見える	0.052	0.633	0.084	-0.160
	子どもにあたりたくなる	-0.002	0.578	-0.191	0.106
	根気がなくなる	-0.061	0.533	-0.128	-0.110
	子どもと居るとイライラする	-0.037	0.526	-0.311	0.109
	育児が辛い	-0.025	0.503	-0.260	0.038
心身が疲れやすい	0.021	0.444	-0.056	-0.101	
肯定感情	育児はやりがいがある	0.028	-0.054	0.661	0.054
	育児は楽しい	-0.027	-0.098	0.614	-0.083
	子育てで人間として成長している	-0.041	0.039	0.597	0.159
	母親として頑張っている	0.170	0.047	0.501	0.050
	幸せだと感じる	-0.339	-0.057	0.456	0.050
	育児や人間関係の悩みを相談できる人がいる	-0.128	-0.021	0.420	0.080
社会参加	社会の一員として働きたい	0.049	-0.040	0.189	0.821
	自分の関心や力を社会で活かしたい	0.040	-0.009	0.300	0.671
	子どもが小さいので働く気になれない	-0.056	0.144	0.246	-0.613
	自分も働いて経済的責任を担いたい	-0.078	0.159	0.064	0.433
固有値	8.09	3.84	2.55	2.00	
累積寄与率 (%)	24.54	11.66	7.74	6.30	
信頼性係数 (α)	0.91	0.82	0.74	0.70	

表3 因子相関

因子	夫孤立感	否定感情	肯定感情	社会参加
夫孤立感				
否定感情	0.344			
肯定感情	-0.132	-0.354		
社会参加	-0.031	0.054	-0.006	

因子抽出法：最尤法

回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法

先行研究は一致して職業をもつ母親よりも無職の専業母親に育児不安が強いことを明らかにしているが（横浜市教育委員会・預かり保育推進員会，2001；厚生省1998）本研究では〈夫からの孤立〉〈育児の肯定感情〉〈育児の否定感情〉については就労形態においては明らかな差は見出されなかった。

母親の育児感情は就労の有無にかかわらず等しいという、以外にも差がないという結果であった。これは本研究の対象者が就労形態にかかわらず、どの母親も心理的オリエンテーションと現実が一致していることによるのであろう。そのひとつの背景として〈社会参加志向〉が現在無職の母親に低いことがあげられる。すなわち、〈社会参加志向〉が低い母親は現在無職であり、〈社会参加志向〉が高い母親が有職であったことによると考えられる。

表4 就労形態別の育児感情の比較

育児感情尺度		無職(N=121)	パート(N=65)	フルタイム(N=117)	分散分析	多重比較
夫からの孤立	Mean	2.09	2.29	2.18	n.s.	
	S.D.	0.55	0.75	0.73		
育児否定感情	Mean	2.30	2.36	2.22	n.s.	
	S.D.	0.61	0.68	0.55		
育児肯定感情	Mean	3.40	3.36	3.42	n.s.	
	S.D.	0.42	0.53	0.48		
社会参加志向	Mean	2.67	3.17	3.30	33.17***	無職<パート
	S.D.	0.67	0.68	0.53		無職<フルタイム

***p < .001

3 夫の家事育児の分担

次に夫の家事育児の分担と育児感情との関係を見てみよう。実際の日常生活で、夫は家事育児をどれくらい分担しているのだろうか。また、夫の家事育児と育児感情はどのような関係があるのだろうか。ここでは夫の家事育児の分担の実態と母親の育児感情との関係を検討する。

3-1 家事育児得点

まず母親にとって父親の家事育児の実態はどのようなものであるのかを見てみよう。

家事育児得点の15項目の構造を明らかにするために、主成分分析、バリマックス回転で因子分析を行った。負荷量が第I因子、第II因子ともに同じくらい高かった「子どもに本を読み聞かせる」「おもちゃの片づけをする」の2項目は除外し、13項目で因子分析を行ったところ2因子が抽出された（説明率54%、表5参照）。第I因子を〈育児〉、第II因子を〈家事〉と命名した。〈家事〉よりも〈育児〉の平均値が高い。このことから日常生活の中で父親は家事の分担よりも子どもとの関係に取り掛かりやすいことを示しているといえる。ではこのような夫の家事育児の分担と母親の就労形態とはどのように関係しているのだろうか。

表5 家事育児項目の因子負荷量と信頼性、因子得点（平均）

		因子負荷量	α 係数	平均
育児	子どもと遊ぶ	0.778	0.132	2.93
	子どもを寝かしつける	0.680	0.284	
	子どもをお風呂に入れる	0.664	0.196	
	子どもの食事の世話をする	0.655	0.447	
	子どもの服を着替えさせる	0.603	0.522	
	休日は自分の用事で出かける	-0.591	0.054	
	オムツを替える	0.582	0.478	
	半日位預けられる(美容院に行ける位)	0.488	0.371	
家事	洗濯をする	0.058	0.825	2.19
	食事の片づけをする	0.188	0.788	
	トイレ掃除をする	0.092	0.660	
	食事の用意をする	0.328	0.637	
	お風呂の掃除をする	0.343	0.595	

(主成分分析 バリマックス回転)

3-2 母親の就労形態による夫の家事育児得点

まず母親の就労形態による3群について算出した。前述の手続きで就労形態を3群（無職・パート・フルタイム）に分け、夫の〈家事〉〈育児〉を一元配置の分散分析によって検討した。（表6）就労形態別では、〈育児〉〈家事〉ともに有意差が見られた（ $F(2, 291) = 3.50$, $p < .05$ ）（ $F(2, 298) = 17.02$, $p < .001$ ）。Tukey法による多重比較の結果、〈育児〉では、フルタイムで働く母親の夫はパートタイムで働く母親の夫よりも有意に高かった。〈家事〉は、フルタイムで働く母親の夫（父親）は無職の母親の夫よりも高く、パートタイムで働く母親の夫よりもフルタイムで働く母親の夫（父親）の方が高かった。

〈家事〉について先行研究では、母親がフルタイムで働いている父親の得点が高くなるという知見があるが、本研究からも同じ結果が示されたことになる。このことは妻も夫も仕事をし

ているという視点で考えれば当然の結果と思われるが、母親の就労形態がパートタイムとフルタイムで差が見られたことは、母親の就労形態で父親の態度に差が見られることを明らかにしている。

表 6 就労別夫の家事育児

		フルタイム (N=107)	パート (N=70)	無職 (N=117)	分散分析	多重比較
夫の育児得点	平均	3.05	2.80	2.92	3.50*	フルタイム>パート*
	S.D.	0.71	0.69	0.53		
夫の家事得点	平均	2.54	2.05	1.98	17.02***	フルタイム>パート*** フルタイム>無職***
	S.D.	0.85	0.78	0.65		

***p<.001, *p<.05

3-3 夫の家事育児と母親の育児をめぐる感情

次にこれら夫の家事育児得点と母親の育児をめぐる感情との関係について検討したい。

家事育児得点を2次元から1次元にするため、質問項目15項目の得点を足して、項目数で割ったものを家事育児得点とした。得点が高い方がより家事育児を行っていることを示す。家事育児得点の平均値は2.62 (S.D.0.60) であった(表7)。家事育児得点が上位30% (2.93以上) と下位30% (2.27未満) で2群に群分けを行った。家事育児得点上位30%を高群とし、下位30%を低群とした。

家事育児得点2群による育児感情との関係を検討するため、育児感情の各得点を従属変数、家事育児得点2群を独立変数として、一元配置の分散分析を行ったところ、家事育児得点低群に〈夫からの孤立〉で有意差が見られた (F (1,186) =138.97, p.<.001)。また、〈社会参加志向〉でも有意差が見られた (F (1,188) =5.39, p.<.05)。夫の家事育児得点低群に母親の育児感情〈夫からの孤立〉が高かった。夫の家事育児得点高群に〈社会参加志向〉が高かったことが見出された。〈育児肯定感情〉〈育児否定感情〉には有意差は見られなかった。

先行研究は、父親が育児に参加せず育児の責任を母親だけが負っている場合に母親の育児不安や否定的な感情が高いことを示している (牧野, 1982; 牧野・中西, 1985; 柏木・若松, 1994)。本研究では〈育児否定感情〉には有意差は見られなかったが、夫の家事育児得点低群に〈夫からの孤立〉が高いことが確認されたことは、夫の家事育児の分担の割合が母親の孤立感を高めることを明らかにしたといえる。また、夫の家事育児の分担が、母親の〈社会参加志向〉を容易にさせていることが示されている。夫の家事育児の分担の割合が母親の育児感情を大きく左右していることを示唆している。

表7 家事育児得点と育児感情因子の平均得点 (S.D.) 及び分散分析結果

因子		家事育児得点 低群 N=95	家事育児得点 高群 N=97	分散分析
夫からの孤立	Mean	2.74	1.78	138.97***
	S.D.	0.60	0.50	
育児否定感情	Mean	2.38	2.26	
	S.D.	0.64	0.60	
育児肯定感情	Mean	3.35	3.44	
	S.D.	0.47	0.44	
社会参加志向	Mean	2.99	3.22	5.39*
	S.D.	0.76	0.60	

*p<.05 ***p<.001

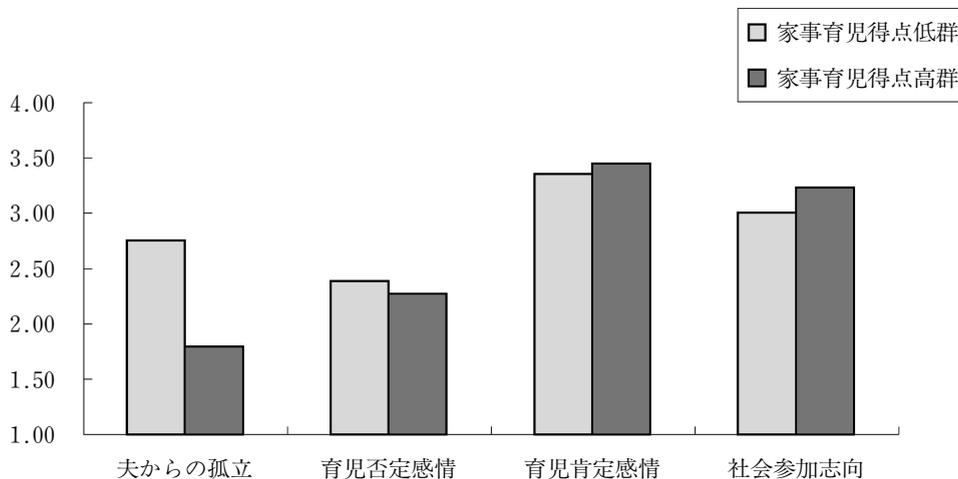


図1 家事育児得点と育児感情因子

4 子どもの年齢と育児をめぐる感情

では次に、これまで0歳から3歳までの乳幼児としてきたが、子どもの年齢によって母親の育児をめぐる感情は異なるのではないかと予想されることから、子どもの年齢ごとに育児感情を比較してみよう。子どもの年齢（0から3歳）を独立変数、母親の育児感情を従属変数にして分散分析を行った結果、〈育児否定感情〉で有意な差が見られた ($F(3,299) = 4.49$, $p < .01$) (表8)。tukey法を用いた多重比較によると、0歳児よりも、2歳児、3歳児で母親の否定感情が高かった。この結果は子どもが探索行動や反抗期など発達課題に即した成長をしていく中で、母親の育児感情はネガティブになっていると考えられ、子どもの年齢によって変化する親感情の危機がここにあると考えられる。0歳児の方が手がかからず扱い良いが、子どもの成長に従って心理的反抗が起こることからこの結果は当然のことといえよう。

表 8 子どもの年齢による育児感情の比較

		0歳 (N=66)	1歳 (N=90)	2歳 (N=89)	3歳 (N=61)	分散分析	多重比較
夫からの孤立感	Mean	2.12	2.11	2.19	2.29	n.s.	
	S.D.	0.57	0.69	0.69	0.71		
育児否定感情	Mean	2.09	2.25	2.35	2.46	4.49*	0歳児<2歳児**
	S.D.	0.50	0.66	0.60	0.58		0歳児<3歳児**
育児肯定感情	Mean	3.52	3.36	3.40	3.33		
	S.D.	0.36	0.48	0.46	0.54		
社会参加志向	Mean	2.92	3.08	3.10	2.91	n.s.	
	S.D.	0.65	0.69	0.67	0.75		

* * $p < .01$

5 妊娠後結婚した母親の育児をめぐる感情

次に、育児をめぐる感情は子どもがどのように生を受けたかによって違いがあるかどうかについて検討する。「望まない妊娠であったか」を直接尋ねることはできなかったが、どのような妊娠状況で妊娠したかについて前述の（表1）手続きに従って尋ねた。

「妊娠してから結婚した」母親と、それ以外の「結婚してから自然に妊娠した」「結婚後に夫と相談して妊娠した」「結婚後妊娠しなかったので治療して妊娠した」「結婚後なかなか妊娠しなかったが自然に妊娠した」母親を2群に分けて比較した。

分散分析を行った結果、「妊娠してから結婚した母親」と「それ以外の妊娠状況」の母親とで、「妊娠してから結婚した」母親の〈育児肯定感情〉が低かった ($F(1,285) = 3.96, p < 0.5$) (表9)。

母親の育児感情で〈育児肯定感情〉に差が見られたので、育児感情の質問項目51項目について2群間の差を検討した。その結果、「妊娠してから結婚した」母親と「それ以外の妊娠状況」の母親について（図2参照）、有意差が見られた。「感情的に子どもを叩いたことがある」「子どもの頃叩かれたりした記憶がある」の平均値が「妊娠してから結婚した」母親に高かった。また、「自分で稼いだお金があればと思う」「自分も働いて経済的な責任を担いたい」の平均値が高く、「幸せだと感じる」「育児はやりがいがある」の平均値が低かった。予定していなかった妊娠での出産、育児に「幸せ」や「やりがい」などの〈育児の肯定感情〉をもつことは難しいという結果であった。

育児不安と「望まない妊娠」との関係を検討した先行研究は、妊娠を「望んだ」母親群と妊娠を「望まない」母親群との比較で、「望まない」群は赤ちゃんを否定する回避傾向が認められ、両感情が拮抗する傾向も見られる（花沢, 1995）としている。しかし、結婚後であっても望まない妊娠で出産する可能性もあることから、望まない妊娠については厳密な研究が必要で

表9 子どもの妊娠状況と育児感情の比較

		妊娠してから結婚した (N=41)	結婚してから妊娠した (N=246)	分散分析
夫からの孤立感	Mean	2.20	2.18	
	S.D.	0.75	0.65	
育児否定感情	Mean	2.39	2.28	
	S.D.	0.60	0.60	
育児肯定感情	Mean	3.26	3.42	3.96*
	S.D.	0.55	0.46	
社会参加志向	Mean	3.06	3.03	
	S.D.	0.63	0.70	

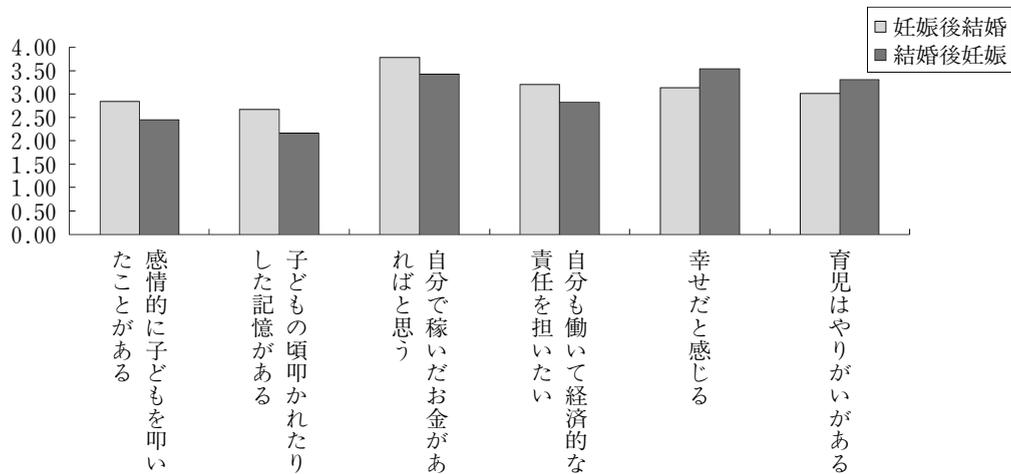


図2 妊娠後結婚した母親と結婚後妊娠した母親の比較

あると考えられる。

〔全体的考察〕

本研究では育児不安を虐待の温床として捉え、育児の孤立化が急速に進んでいるという知見から、現時点での母親の育児をめぐる感情がどのようなものと関係しているのかについて検討した。まず、育児感情の構造を検討した。育児感情は〈夫からの孤立感〉〈育児否定感情〉〈育児肯定感情〉〈社会参加志向〉の4因子で構成されていることを明らかにした。次に、これまで育児不安や育児ストレスに関する先行研究は、職業をもつ母親よりも、無職の母親に育児不

安が強いことを明らかにしているが、本研究では〈夫からの孤立感〉〈育児肯定感情〉〈育児否定感情〉について、就労形態で明らかな差は見出されなかった。母親の育児感情は就労の有無にかかわらず等しいという結果であった。

次に、夫の家事育児の分担と母親の育児感情との関係について検討した。

家事育児の構造は〈家事〉と〈育児〉から成り、父親の〈家事〉の平均値よりも〈育児〉の平均値が高かった。これは日常の生活の中で父親は家事の分担よりも子どもとの関係に取り掛かりやすいことを示しているといえる。

夫の家事育児の分担と母親の就労形態の関係では、〈育児〉は、フルタイムの母親の夫がパートタイムで働く母親の夫よりも高く、〈家事〉では、フルタイムで働く母親の夫が、無職の母親の夫とパートタイムで働く母親の夫よりも高かった。この結果は先行研究と一致していた。母親の就労形態がパートタイムとフルタイムで差が見られたことは、母親が働いているにもかかわらずフルタイムか、パートかで父親の家事育児の態度に差が見られることを明らかにしている。パートで就労する母親が増加していることから、パート就労する母親に対して父親の理解が求められると考える。

夫の家事育児の分担と育児感情との関係では先行研究のような〈育児否定感情〉に差は見られなかったが、夫の家事育児の分担の低い群の母親に〈夫からの孤立感〉が高いという結果が明らかになった。夫の家事育児の分担が母親を育児不安から救う鍵を握っているといえる。

次に子どもの年齢で母親の育児感情は異なるのではないかとの視点から、子どもの年齢と母親の育児感情との関係について検討した。その結果、0歳児よりも2歳児、3歳児で母親の否定感情が高かった。年齢が高くなるにつれて、つい手が出てしまうなどの訴えが多く聞かれることを裏付けたひとつの結果といえる。

最後に妊娠状況と育児をめぐる感情との関連について検討した結果、「妊娠してから結婚した」母親の〈育児肯定感情〉が低かった。質問項目ごとに検討した結果では「子どもの頃叩かれたりした記憶がある」「感情的に子どもを叩いたことがある」に有意な差が見られた。「妊娠してから結婚した」母親の平均値が高かった。先行研究では虐待の世代間連鎖（西澤，1994；斎藤，2003）が示されている。今4人に1人が「できちゃった婚」（厚生労働省「人口動態統計特殊報告」2002）との報告がある。本研究の結果からも「妊娠してから結婚した」母親の〈育児肯定感情〉が低いことなどが明らかになったことから、虐待予防の視点で「妊娠してから結婚した」母親への支援の方向性への検討が望まれると考える。

本研究では0歳から3歳までの子どもをもつ、今子育てしている母親の育児感情がどのようなものに関係しているかについて検討した。本研究は母親だけを対象としたが、父母を対象として検討する必要性があると考えられる。

文 献

- 柏木恵子 1998 社会変動と家族の変容・発達 東洋・柏木恵子（編），社会と家族の心理学（pp.9-15） 京都：ミネルヴァ書房。
- 柏木恵子 2003 家族心理学 社会変動・発達・ジェンダーの視点：東京大学出版会。
- 目黒依子 1987 個人化する家族 東京：勁草書房。
- 落合恵美子 1997 21世紀へ〔新版〕：家族の戦後体制の見かた・越えかた 東京：有斐閣。
- 永久ひさ子 2001 個人としての私 伊藤美奈子・柏木恵子（編），女性のライフデザインの心理 東京：大日本図書。
- 柏木恵子・永久ひさ子 1999 女性における子どもの価値：今，なぜ子どもを産むか 教育心理学研究，47，170-179。
- 毎日新聞社人口問題調査会 1998。
- 厚生科学研究所 1997。
- 厚生労働省「人口動態統計特殊報告」 2002。
- 大日向雅美 1996 子どもを愛せない最近の母親たち 大日向雅美・佐藤達哉（編），子育て不安・子育て支援 現代のエスプリ，342 至文堂。
- 菅原ますみ 1999 子育てをめぐる母親の心理 東洋・柏木恵子（編著），社会と家族の心理学（pp.47-80） 京都：ミネルヴァ書房。
- 柏木恵子 1979 母親の母性意識について：一般の母親と母子寮の母との比較を通して 母子研究，2，22-33。
- 柏木恵子 1982 子どもの発達環境としての女性，母親，家庭をめぐる現状と問題 母子研究，5，226-245。
- 柏木恵子 1993 日本における母性・父性をめぐって：思想的歴史的背景と発達心理学の理論と研究。
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究，5，1，72-83。
- 牧野カツコ 1987 乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安 家庭教育研究所紀要，9，1-13。
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 1994 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理研究，64(6)，409-416。
- 田中昭夫 1994 保育園児の母親への育児援助に対する基礎的研究 保育学研究，32，107-115。
- 田中昭夫 1997 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究 乳幼児教育学研究，6，57-64。
- 原田正文・他 2003 子育て実態調査「兵庫レポート」。
- 横浜市教育委員会・預かり保育推進委員会 2001。
- 厚生省 1998 内閣府国民生活局「平成13年度版国民生活白書」。
- 清水嘉子 2003 母親の育児ストレスと夫の家事育児協力：子どもの虐待とネグレクト。
- 花沢成一 1995 望まぬ妊娠・出産の心理学的背景 厚生省心身障害研究，親子の心の諸問題に関する研究，平成6年度報告書，pp57-62。
- 平山順子 1999 育児期における専業主婦の個人化欲求：経済的資源へのアクセス志向性との関連を中心に 発達研究，14，62-77。
- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎 1999 乳幼児期の子どもをもつ親における仕事観，子ども観：父親の育児参加との関連 発達心理学研究，10(3)，189-198。
- 柏木恵子・他 2003 With Youさいたま 共同研究報告書「育児期女性の就労中断に関する研究」な

母親の子ども・育児感情（山川玲子・柏木恵子）

「ぜ仕事を辞めるのか？辞めるとどうなるのか？」。

牧野カツコ 1982 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉 家庭教育研究所紀要, 3, 34-56。

西澤哲 1994 子どもの虐待—子どもと家族への治療的アプローチ：誠信書房, 68-79。

斎藤学 2003 虐待する親とはどういう人たちか：子どもの虐待とネグレクト，日本子どもの虐待研究会, 98-105。

服部・原田 1990 乳幼児の心身発達と環境—大阪レポート。